

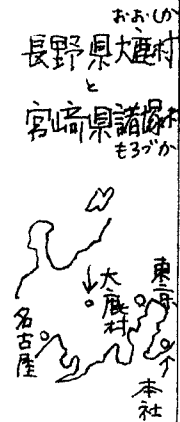
報 籠屋新聞

創刊は昭和50年代後半つまり30年近い歴史を有する業界の情勢をクシの紙は発行部数が多い。

トカラ塾 ホームページ

〒117-0001 / USER, ecc.
 U-TOKYO.ac.jp/08007/
 「ウメエ」 「トカラ塾」

かご屋にも
 アスガ有リソウ



新品の注文を下さる。同村に

うれし知らせが、諸塚村の甲斐耕平氏からあった。十一月三日の祭りに猿皮を招きたいから、連絡をとってくれとの知らせであった。かご屋も一緒に来てくれとのこと。猿回しの前座の声をかけてもらったわけだ。右図市の猿舞座一行との公演(?)となるはず。

かご屋は大鹿村の花見が仕事始めである。村内の台所や野良で作っているカゴ、ザル修理

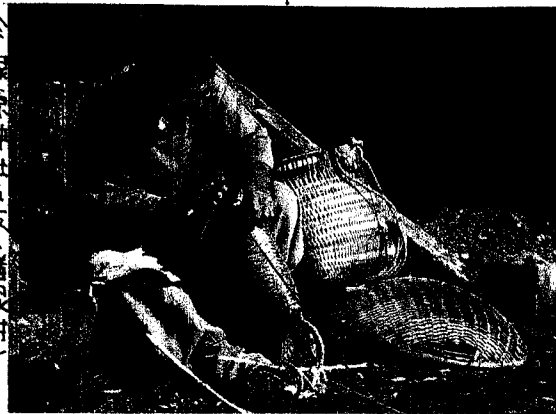
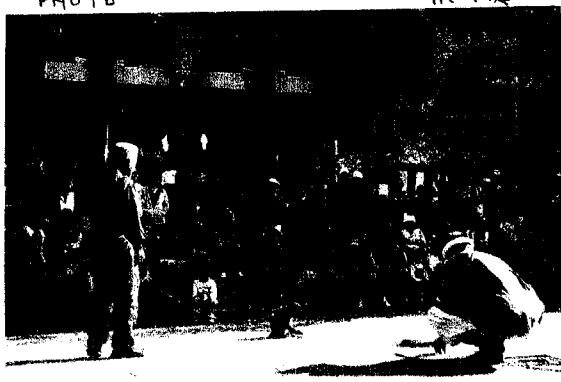


PHOTO かご修理 荒川健一

於 塚原神社石段(諸塚村)

住むアキスママ夫婦にはお世話になること。耳よりな話

昨年春に「竹細工入門」なる良質の書目が発行された。かご編みの教科書である。本年も「竹細工入門」が出る。ア不言う。と言



PHOTO

「猿舞座とかご屋」於 何味神社

編み方の本、今度のは組み方の本。丸竹にホゾ穴をあけて、イスやテーブルと組み立てる。日貿出版社より

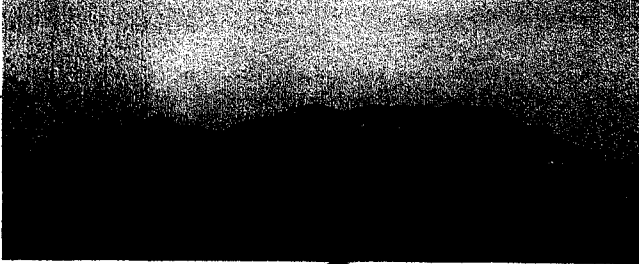
中之島の藤井清彦が蛇皮線が奄美大島の島唄を奏でながら唄う。その録音も、海上で唄へだてた諏訪之瀬島の前田アグリバアが一心に聴いていた。聴き終えて、サーサーと擦り音もたてる五号リールに向って声の返信をふまこむのだ。

西隣りの平島
でも、青年たちが清立のジイが唄を聴く。笑みない、踊らない。焼酎を口にしながうなはずくばかりであった。あの、南国リズムの異名をもつ「六調」のリズムを耳にすると、体の芯の方からウズクズと踊り出してしまう若者たちがである。そして、後から加えられたアグリバアの「元気にしもれよ」を自らへは、けまして取られた。

れたしは何度も説明した。「遠くんだ。これは藤井清彦ジイへの伝言だ。あって、日高清彦ジイ死びはなんだ」の声はどこかなかった。連れ合いとどしたばかりの平島の清彦ジイへの励ましとして皆は唄っていた。

「元気にしもれよ」
「アグリバア」(諏訪之瀬島) どうして理解して
もうえなかったのか
「エント」に「うつつ」といまだに分からない。いとう「エント」に「うつつ」といとう「コトバがある。電話口の向うにいる人に「きょうさうらう、ウツ、タルピン」ケイブルの調子が良いのか、「良く向まよれる」といとう意味である。「うつつ」

平島 十島丸船上から荒川健一が撮る 2009.11.



が何なのか。「移る」「映る」「写る」「奥行き」なのか。古事記には「顕る」がある。神々がありありと目の前に現れる。「うつつ」といとう。マニがフルバンの音を聴いて「うつつ」させて、フルバニがマンの文字と心に響く五音に翻って「うつつせ」たのなら、面会が可能だったかもしれない。

次回、三月六日(土)の「南国語」では「うつつ」とはどいう意味なのか、島の中での具体例を挙げて、核心に迫りたい。これまた、うつつに期待。

お礼とあ
びと訂正
教父の
たごさんあり
がとてした。
振替番号
が向まよそ
いてごめい
くとおけま
した。社主

00 001601 111879 振興出版新開社
00 001601 111879 龍興出版新開社

誰にも文句を言わせないアツシヨ紙、それは「カゴシン」、こうしてつかあせい。4頁

南風語り

三月六日(土) 午後三時
題 「うつる」スライム映
— 音とコトバ —

四月二十四日(土) 午後三時
題 「オオの歩み方」①
— たのち廻リカ —

場所：ギヤラリー・ガラ

小田急線梅ヶ丘駅下車25分

電話 〇三三三四三九三三三四

三月六日 午後六時から

会場 やまどり屋 備長屋

〇三五七九九 三四五二八

梅ヶ丘駅前 250円前後か

講話は向かないか、飲み
たい方は直接 やまどり屋
にお申し込み。春の光かけ
を祝いますよう。

癖書独毒詠

「西御として賊と称するは何ぞや」
評
丁丑公論 福澤諭吉

諭吉の説く西御隆盛論が

こんな小さな紙面で語り尽

せないことは承知している。明治

十年・丁丑(みすけのう)の西南戦

役で生涯を終えた西御は、たまた

に賊臣の汚名を着せられ、断罪止

むことがあった。

この書は戦後があった年に書かれ

ている。諭吉三十一歳の秋である。

なまなましい世論の中で、公忠と

はばかられ、世に向われたいのは諭吉

最晩年の明治三十四年であった。

諭吉が論じたかったのは、隆盛の抵抗の精神

であった。それは自治の権利を奪明するに至る

源であり、諭吉法の「独立」「私立」である。

これ以上の立入りは止めておく。

後年の述懐の中に自らの洋学に向った姿勢に

対して「何のために辛苦勤学したるや」の

自問に答えるように、「出来がた王事を好ん

び之を勤むる心」と解く。この解者は、その

瞬間、破顔と禁じえなかつた。丸山真男が

を思い出したからである。鶴見俊輔との対談

の中で言う。「わたしが丸山はアマノリヤめたは

もんだ。たと思つてんですよ。もこのアマノリヤ

の先生は誰かといえはやはり福澤諭吉です

ゆ」(「語りつぐ戦後史」一巻 思想の科学社

69年) 大人たちは人と敬(せう)か、笑(わら)めさせることを知っている。

福澤諭吉著作集

第9巻



丁丑公論 瘠我慢の説